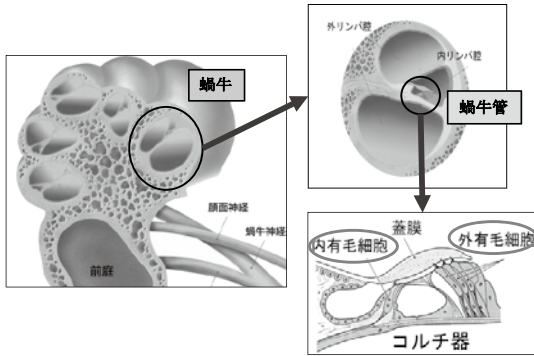


# 「老年性難聴について」



**保健現場**  
**レポート**

鳥取大学医学部附属病院  
耳鼻咽喉科頭頸部外科  
医師  
やざま ひろあき  
**矢間 敬章** **385**

## 【老年性難聴が起こる仕組み】

前回（2月号）お話しした耳の構造のうち、加齢により影響を受けやすいのは内耳にある「蝸牛」と呼ばれる器官です。蝸牛には有毛細胞と呼ばれる神経細胞があります。この働きが弱くなると小さな音には反応しにくくなり、大きな音には過敏に反応するようになります。接触の悪い電線のようにですね。

そのため、「小さな声ははっきり聞こえないけれど、ちよっと大きな声になるとすぐうるさく感じてしまう」という症状になります。これを医学的に「内耳補充現象」と言います。

この症状は、次第に慣れていくため様子を見ることが多いのですが、発症早期では非常に不快に感じるものです。特に、聞こえないから少し大きな声で話してもらおうとすると、逆に耳ざわりになって聞き取りにくい、ということになり得ます。

その他、聴神経や脳などの神経の反応低下も一因とされ、これを特に「後迷路性難聴」と呼びます。

## 【老年性難聴の特徴】

### ①高音域からの聴力低下

老年性難聴の特徴として、高音域から聴力低下が始まるのが一般的です。言葉の母音（ア、イ、ウ、エ、オ）は低音域なのでよく聞き取れるのですが、

子音の発音は高音域に関わる音域で、特に「力行」や「サ行」といった音が聞き取りにくくなります。

### ②判別能力の低下

老年性難聴になると、例えば「かさ」と「あさ」や、「しゅり」と「きゅうり」など言葉の聞き分けが難しくなり、会話をしても正しく意思疎通ができなくなる可能性があります。つまり「判別能力の低下」が生じます。難聴者が「聞こえない」と言うと、話し手側は「声が小さかったかな？」と思ってしまうがちですが、実は「音が小さくてわからなかった」だけではなく、「音の有無はわかるが、内容が聞き取れなかった」という意味で「聞こえない」と言っていることもあります。

## 【聞こえづらさを抱えた人への対応】

「聞こえない」と言われた場合の話し手側の通常の反応は、同じ事を話さないといけないので、つい大声かつ早口で話してしまいます。しかし、聞き手側は「内耳補充現象」と「判別能力の低下」によって、より聞き取りにくくなる場合があります。誰しも同じことを何回も伝えるのは気が進まず、イライラしてしまいます。ですが、大声で話されると聞いている方はなんだか怒られているように感じ、人と話すことを避けてしまうようになります。

聴覚を使わず会話をしないような生活が続けば、ひいてはひきこもりやうつ病、認知症を進行させてしまう危険性もあります。

## 【話し手側のポイント】

補聴器装用の有無に関わらず、もう一つ大事なことは、話し手側の話し方です。口元を見せながら、ゆっくりはつきり、言葉の一拍一拍を大切に発音してあげると、意外とはつきり聞き取れるようになります。

話し手側は、「聞こえない」ことを責めないことが大切です。

## 【補聴器活用には、まず受診を】

難聴の解決策の一つとして、補聴器を活用することは有効ですが、すぐに飛びつかないようにしましょう。まず耳鼻科で診察を受け、耳の病気がなく、補聴器の装用効果があるかどうかを確認すること、適切な補聴器調整が受けられる場所（補聴器外来や認定技能士のいる補聴器店）で補聴器を購入することが大事です。

優しい笑顔で会話を楽しみたいものです。 「聞こえづらさ」を正しく理解し、聞き手側も、良好なコミュニケーションが図れる町を目指していきましょう。

